

### 第3回北九州市文化振興計画改訂検討会 議事録

日 時：平成27年10月9日（金）15:00～17:00

場 所：北九州市 5階 特別会議室A

出席者：井生委員、今川委員、上田委員、江口委員、柏木委員、古賀委員  
近藤委員、椿委員、津村委員、羽田野委員、三船委員（11名）

事務局：大下市民文化スポーツ局長、高松文化部長、  
稗田美術・舞台芸術担当課長、古林文芸担当課長、重岡メディア芸術担当課長、  
福田松本清張記念館管理運営担当課長、米満文学館管理担当課長、川副  
漫画ミュージアム管理運営担当課長、榎田美術館普及課長、永元自然史・歴史  
博物館普及課長、用田企画課長（教育委員会）

#### 【全体構成・理念等】

##### <古賀氏>

これからの5年間は、北九州のまちと文化のことをきちんと考えるということ、この計画の中に入れ込んだほうがいい。理念について、何かびたっとくるものが今すぐに出て来ないのであれば、若干抽象的であってもある程度のところで抑えておいて、施策や事業の具体的なところで「らしさ」を出していくということに力を注いだほうがいいと思って拝見した。

「現状と課題」の課題から、それを解決するため、理念のもと戦略が定められるものだと思うが、間に入っている「計画での取組」は戦略との整合性がとれておらず違和感がある。むしろなくてもよいのではないか。

第3章の施設の取組みに関して、今回、戦略を掲げるのであれば、これを実現するために、施設としてはそれぞれにどのような取組みをやっていくのかということが書き込まれるべきではないか。

##### <津村氏>

（改訂案構成の）基本理念からして、多くの人には読みにくく理解しにくいのではないかと感じる。理念の部分は、北九州のこれまでの芸術・文化に関する歴史観をしっかり持ったうえで、さらに今後芸術・文化によってどういう街にしていくのか、新しい歴史をどうつくっていくのかということをつかりやすく展開し、それをベースに個別の内容を続けていかないと、計画全体が分かりにくいものになる可能性があると思う。

（資料1-3「目次の検討」について）たくさんの項目が総花的に羅列されているが、これとこれはくっつけられるというようなタイトルもたくさんあり、項目の挙げかたについてももっと議論が必要であろう。

また文章が読みにくいことについて例を挙げると、施策1で「市民の芸術・文化活動の促進」とあるが、このような行政的な書き方をやめてはどうだろうか。例えばその部分は、この街に住む全ての人々は、芸術文化に触れることで感動と豊かさを感じ

ることができる、というような、読みやすく分かりやすい内容にしてはどうだろうか。読み手のことを考えれば、それはとても重要なことだと考える。

さらに、内容の部分に何をどう盛り込んでいくかということは今後しっかり議論していかなければならない。例えば子どもたちや高齢者への取り組みはもちろんだが、「国際的な」と言うときに、居住している外国人（マイノリティ）の方々や、さらに今後増えてくるであろう訪日外国人（インバウンド）の方々に対してどうするのかということがほとんど欠落しているなど、内容に関する議論の余地はまだあるのではないかと感じている。

<羽田野氏>

基本的には現行計画を見直すというのが最終的で、基本的には今あるものを尊重しながらやる。

「シビックプライド」という言葉が非常によく出てくるが、住みやすいまちという意味でのシビックプライドとするのか、それとも北九州特有の文化や芸術が誇りに思えるのでシビックプライドになるのか、その辺は少し分かりにくい。

基本的に現行計画をじっくり見直すということだから、戦略とか取組みを誰がどこで、いつまでやるのかとか、そういうことを整理したほうがより現実的ではないか。

<三船氏>

理念について、私たち市民が進んで文化に関わろうとする姿勢や、今、自分たちのまちにある文化を継承して守っていくなど、次の世代につなぐという役割を感じながら、文化に進んで親しむという態度が、文化を育てていくことにつながるというふうに解釈している。

<柏木氏>

「北九州の文化がうまくいっているのか」「今、どんな花が咲いているんだ」という、それらの出発点によってはえらく違うのではないか。この50年が失敗だったのか、うまくいっているのか、うまくいっていないかによって、この読み方が全て変わってくるなと思っていて、それを今のところまだ見せてもらっていない。

シビックプライドを持ち出したのは、私はある意味ではうまくいっているのかなと思っている。北九州の優れた文化土壌を誇れるまちだということをもう少し前面に出してもいいのではないか。それをさらに強めるにはどうしたらいいか。

文化のバリアフリーに触れていない。例えば障害者、マイノリティもそうだが、外国人、全てそういった文化の担い手になり得るので、その辺もぜひ触れてほしい。障害者は特に、福祉だけではない。

本市は働く世代の文化活動というので、昔から企業の文化活動がものすごく盛んで、今は少し廃れている。昔は企業メセナだったが、今、CSIというまた違った切り口の社会的責任を企業は問われている。そういった意味では、私は企業との連携というか、企業にお金を頂戴というのではなくて、社員に「芸術活動に行けよ」とか、「職場の中のサークル活動をもう少し盛んにしてください」といった支援を企業はできるので、そういった北九州のいい土壌をもう一遍掘り起こしてはどうかと思う。総論の中で触れてほしい。

<江口氏>

この計画はどこまでを市民に伝えるものなのか、理念やビジョンを伝えるものなのか、具体的な話まで伝えるものなのか。

<事務局>

基本的に、理念あるいは具体的な施策、それと具体的な事業、全て市民にお伝えするという形になる。北九州市の場合、かなりの事業があるので、それは主な事業をピックアップするという形になる。

<江口氏>

理念やビジョンに関して言うと、私は北九州らしさ、北九州でなければならないビジョンみたいなのは、ほぼ1つも感じないというか、唯一としては漫画と演劇くらいな感じ。

理念やビジョンからちゃんと伝えるということであれば、そこに北九州らしさをちゃんとしっかり組み込む。それはどうしてもおしなべて、平均化して行って、どこにでもあるようなものになるとしたら、やはりそこは具体的な施策に、どうしても北九州の特徴をしっかりと盛り込まざるを得ないのではないか。

文化というのは、どこまでのことを文化というものなのか。

<事務局>

振興計画での文化とは、基本的には、文化芸術振興基本法に定める伝統文化、文化財といったものなどを考えている。

<上田氏>

計画を読む人、使ってもらう人のための方向性で、構成を作ったほうがいい。

市としては、「こういうことを盛り上げていきたい」という方に「お手伝いができませんよ」という目線が必要。

これだけの手厚い拠点を北九州市が持っているというのは、やはり政令指定都市の力だと思うが、この拠点が、皆さんがやりたいとか学びたいとか、そういうことに向けてどんなことができますよというふうな書き方で具体化されていると、ありがたいと強く感じている。

今、「文化の薫るまち」ではないという前提でスタートしている。そこまで卑下しなくてもいいのではないか。それぞれパワーを持っているいろいろな集まりがある。それをもう少し伸び伸びとできるようにという、その書き方を少し練ってもよいのではないか。

<今川氏>

今回提示された次期文化振興計画における「理念」については、<芸術>という言葉が除かれているところから、「文化の裾野に重点を当てよう」「裾野の市民文化をもっと充実させよう」というところで、理念が定まった、施策の立ち位置が定まったと感じられた。

<イメージ案>を見た限りでは、どこに向かって情報発信をしているのかが曖昧。「国内外に積極的に発信」とあるが、それ以前に市民に対しての発信に重点を置くことが必要では。その文言がここには欠けている。

また「観て 楽しむ」は、文化は「観る」のみに限らず、また、「育み 創る」は、文化を育むのか、人材を育むのか、あるいは、「支える」は誰が何を支えるのか、というように、取り組みにおいて主体や目的が的確に伝わってこない。

<井生氏>

もともとこの会議というのは「改訂検討会議」で、新憲法をつくる話ではない。少なくとも5年前に文化政策が対外的に出されて、5年経ち、イメージ図にある課題の部分が重点になるのだろうと思っていた。

この計画というのは、この5年間で北九州市としてどの方向に行くと行政を縛るもの。行政がこの5年間この政策を進めようということが、はっきりすればいいと思っている。5年前にアーツカウンシルの検討が出ていたが、今後どのように取り扱うのかを検討すべきだと思う。検討もしないのであれば、文言に書くべきではない。

<事務局>

アーツカウンシルについては、5年前からそういうような方向性、何かできないか検討したいということを出ていた。市としては人材の問題であったり予算の問題であったり、文化芸術をどのように評価するのかというのを、議論しながら結論が出ないまま現在まで来ている。最終的にどうするか、本当につくるのかどうかもはっきり出ていないということが現状である。

<羽田野氏>

微調整であれば、今までやってきたことの反省というか、現状で何ができて、何ができていないのかということをしかりしないと、PDCAが回らない。そうは言いながらも行政的に、何でもとにかくもう1回見直してみようということなら、こういうふうに議論をしていい。最初につくったものを基本にして微調整するのであれば、課題というのは現在まで実現できていないものになると思う。

<椿氏>

市民へ発信するということであれば文面に北九州市に限らず、役所言葉が多い。芸術文化を創造し、発信し、にぎわう。誰がどこに向かって創造して、誰に発信するのか、4つの戦略に具体的な例を挙げて示すことができるとよりわかりやすいものとなると思う。これまでの議論を混ぜ返すようで申し訳ないが、この計画案は行政のためにやるのか、市民のために活動を手助けすると言っているのか？わかりにくいので、具体例をあげるとわかりやすいと思う。

芸術と文化というのは全然違って、文化というのは今だと思う。その文化が熟成した、歴史の波に洗われたものが芸術。今、文化をどうするのか、芸術家を育てるためにやるのか、その辺のところもとても分かりにくい表現になっている。

文化的な街づくりから芸術家が育つような環境作りを盛り込むとか、そこまで踏み込むかどうか？

## 【具体的事例】

### <近藤座長>

この委員会としてはどういう形でこの策定に関わっていくか、あるいは5年間に対して、どういうふうな方向性と位置付けをしていきたいかということがあれば、ご自由にご発言いただければと思う。

### <江口氏>

北九州がこういうことに対しての本気度が、そもそもよく分からない。文化や芸術と言ってしまうと、なくたって人は生きていけるものだから、その優先順位がそんなに高くないのか、それとも切羽詰まっているのか。本当に切羽詰まっているのだったら、ある程度ドラスチックな考え方も入れていかなければいけない。

### <津村氏>

過去は、音楽は音楽、演劇なら演劇で、好きな人が自分でやっていればよいという考えもあったが、近年は、舞台の上だけではない芸術の持っている潜在的な力が広く知られることになり、人間が生きていく上でいかに芸術文化が必要か、芸術文化は人の生死に関わるという考え方が、世界的な主流となっている。

### <津村氏>

自分の住む街がこうあって欲しいというのはみんなにあるものだ。その上で芸術文化が全ての人に100必要なわけではなく、その中の1つの要素をツールとして提供することで、例えば街として自殺者の数が減る、ということも考えられるわけだ。

芸術文化は街の新しい産業の話にもなるのだが、これまでも国の産業や動きにすごく影響されてきたものであり、そういう意味において今、この国の立ち位置、アジアに対して、世界に対しての立ち位置というのが、この10年間でドラスティックに変わってきたことをきちんと把握し、それを今後どのようにして担保していくかということを考えなくてはならない。芸術文化というものを昇華されたアートだけではなく、もう少し底辺に落としていって、それぞれの身近な部分として提供していく作業ということが、これからの自治体の、ある意味でのサービスの1つの部分であると思う。

### <事務局>

もともと北九州は、例えば戸畑の祇園であったり、地域の文化伝統であったり、さまざまなものがいっぱいある。文学についてもかなり著明な作家が出ている。漫画文化とか、かなり幅広い中でしっかり地域に根付いた文化というのがあると、我々は考えている。今回の計画は、それを土台にしてより一歩進めるというのが、今回の狙いだと一応考えている。

### <江口氏>

どれくらいの熱意というか、切羽詰まっている感じなのかによって、優先順位をつけるとしたときに、順番が変わってくるのではないと思う。産業として本当にやらないといけないんだというレベル、段階だったら、そこを優先して、産業に結び付くものをつくって輸出するというのが最優先項目になると思うし、いやいや、そこまではないんだというのだったら、市民レベルで本当にサークルやそういうものを、や

りやすい形でやっていけるようにする整備が、最優先と思う。

<井生氏>

何とかのまちというのは、具体的なイメージを持って文言を書きいただきたいと思う。

<今川氏>

文化関係の情報の集約と発信については、市政だよりと芸文財団が作成する冊子があるが、これらは市やその外郭団体が主催するものに限られていて、民間が主催するものや民間の文化施設で開催されるものについては含まれない。今後は民間も含めて情報の集約と発信が出来る拠点づくりが必要であり、市内の文化情報が網羅された情報紙（タブロイド版の様なもの）が各家庭に入るようになればと思う。

リタイアしたばかりの団塊の世代が、文化的なものに関わろうとしたときに、意外に情報が限られているということを知る。彼らたちにボランティア活動も含めて、文化の担い手にもなっていただきたいので、情報の集約と発信は大切。

一方、行政においても各部署で作る冊子やポスターなどにおいて、時々間違いが見られるので、専門部署に問い合わせるなど、横の密な連携が必要では。

<近藤座長>

館の連携というのはどうなっているのか。ネットワークではないが、そこをまとめるような仕組みづくりというのが必要かもしれない。

<柏木氏>

一番の課題は、代表者・指導者の高齢化、マネジャーをする人がいないということ。

アートマネジメント的な人をこの5年の間につくって、いいマネジャー的な人、演奏家を支える人たちをつくるべき。6カ月とか1年コースの、そういったアートマネジメントを勉強してもらうコースをつくるというのは、喫緊の課題ではないかなと思う。

アウトリーチを市長は大々的にと言うが、実は学校現場の理解がやはり一番大事。アウトリーチという趣旨を先生方に理解してもらうのが、私は先ではないかと思う。教育センターとか、そういった研修機関とも連携しながら、こういった芸術文化の素晴らしさをある程度理解をしてもらって、授業の中でこの芸術文化をどう生かしてもらうかという勉強をまずしてもらわないと、アウトリーチというのはなかなか成功しない。

情報発信については、5年後、10年後、果たしてペーパーがどこまで生き残っているか。今の若い人は全てスマホから情報を取り込むので、デジタル化とかモバイル化への対応、Wi-Fi化を施設の中でやる、そういった仕組みを同時に取り入れるべきではないか。

<今川氏>

館同士で、「選択と集中」、それぞれの館が予算を上げるが、そうではなくて、この年はこれに特化しようというので、予算をそれに集約するというやり方があっていいはず。そのために、館同士で集まって情報交換しようという発足したが、結局、館によっては事業を2年前から、もう1年前からと異なっており、なかなか現場は難

しい。

<上田氏>

国際音楽祭も、何かこじんまりやっているという印象になってしまう。街を挙げてやっているというふうに、市民としてはみない。

<津村氏>

館同士のネットワークの話があったが、劇場もネットワークを組んで事業を行ったり、拠点劇場として人材育成の研修会をずっと行ったりしているのだが、劇場が出来る限界というものがあり、これ以上舞台以外に予算を投入するのにもやはり限界がある。

そういう意味において、アーツカウンシルのようなものは必要だったし、今も必要である。財団でもなく、文化振興課でもなく、1つの館でもなく、やはりどこか網羅していく組織が必要だ。5年前の計画策定時に、北九州は今、アーツカウンシルを立ち上げるには絶妙なタイミングだと思った。次の5年では、しっかり議論してつけないと、これはもう間に合わない。

<江口氏>

伝え方みたいなものはきちんと考えていかないといけない。

4つの戦略で、順番的にも、何を優先して重点的にやっていって、どういう順番でいくか。

<三船氏>

「合唱のまち、北九州」となったとき、どの方向に行けばいいのかというところのクエスチョンがたくさんある。マネジメントというものが欠けているのではないか。

アウトリーチも、そういうニーズに合ったアウトリーチができれば、これ以上のことはないと思うし、中学校で言えば、文化部、体育部のように、市民から大きく脚光を浴びることはないけれども、地道に文化芸術を親しんでいる子どもたちが、より子どもたちのニーズに合った文化活動ができるのが一番いい。

<羽田野氏>

北九州は非常に映画が盛んである。例えば芸術学部までいかないけれども、若い人たちを呼び寄せるために、何かそういう映画に関する芸術的な講座をつくる。

<津村委員>

江口委員からアーティスト・イン・レジデンスに関する話が出たが、アーツカウンシルに関する議論の中では、その観点もしっかり整理し、計画の中に取り込んでいきたいと思っている。

<椿氏>

アウトリーチということで申し上げますと、何でもありという感じでどんどん子供たちに鑑賞や体験をさせているような感じを受けているが、通常感じることのできないような本物の芸術作品を鑑賞することを集中的に鑑賞をさせるプランも入れることも重要かと思っている。具体例として挙げてみてはどうだろうか。

<古賀氏>

今の文化政策のトレンドというのは、文化や芸術が持っている力というのを社会のいろいろな領域に活かしていく。都市政策の基盤にしていくということだと思う。

ここで話されていることと、文化や芸術の力を社会に活かすということが、まだきちりとリンクしていないなと感じる。

必ずしも、カウンスルではないのかもしれないが、何らかの形で、今ここで議論されているようなことを続けて話し、文化で北九州のまちをどうしていくのか、もっと良いまちにするにはどうしたらいいのかということをお話する場を継続してもらっていくことを、ぜひとも位置付けるべき。

本当に文化や芸術の力で解決しなければいけないものは「これ」というのが見えていないのであれば、北九州というのは大都市なので、いっそのこと文化や芸術の力というのを活かす、世の中の日本の流れというものを、しっかりとモデル的に見せていくということをやってもいいのではないかと。「社会包摂」というふうに、今新しく出て来た言葉が現在のプランの中にはないので、それをしっかり入れなければいけないし、それはいったい何なのだとすることを、具体的に見せるような事業もやっていかなければいけない。拠点施設と書いてある各文化施設の中で、社会包摂に関わるようなことが取り組まれていかなるべきではないかと思う。

「シビックプライド」という言葉の使われ方が少し気になる。郷土愛とかと置き換えられるような意味合いで使うと少し違うのではないかなという気がしていて、それがクリエイティブな方法で郷土愛を発信していくということも含まれる領域、郷土愛から自分のまちのことを我がこととして、自分が行動していくということにつながるのシビックプライドだと思う。

北九州のまちが好きですというだけではなくて、好きだからこのまちに何か弱いところがあるのだったら、そこをカバーするために、私、こういうことをしようかなという行動につながるというのが、シビックプライドではないかと思う。